

# 体育・スポーツ指導力養成プログラム通信

第4号 2018年度インターンシップI・II, アンケート調査, 資格認定の報告

2019年4月19日発行

## はじめに

体育・スポーツ指導力養成プログラムでは、1年間を通じて陸上、体操、サッカー、バスケットボールの小学生スポーツ教室で指導実習（インターンシップ）を行っています。2018年度にインターンシップに参加した学生は28名（I：14名、II：14名）でした（図1）。スポーツクラブ指導入門からインターンシップへと何度も子どもたちと関わる中で、子どもとの信頼関係を築くことの難しさ、専門知識が少ない場合の指導の難しさをはじめ、学生たちは様々な難しさを感じています。しかし、学生たちは子どもたちができるようになっていく姿に力をもらい、少しずつ自信が芽生え、プログラムを始めてすぐの自身と比べると確実に成長し、教員として生きてくる力がついてきていることを実感しています。

今号では、2018年度のインターンシップでの学生の学びの一端を紹介します。加えて、2018年度に実施した卒業生アンケートの結果の紹介（一部抜粋）、資格認定者の報告もしていきます。

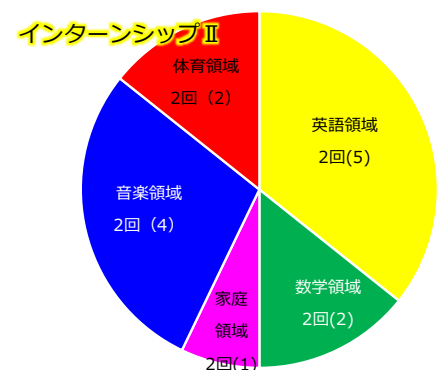
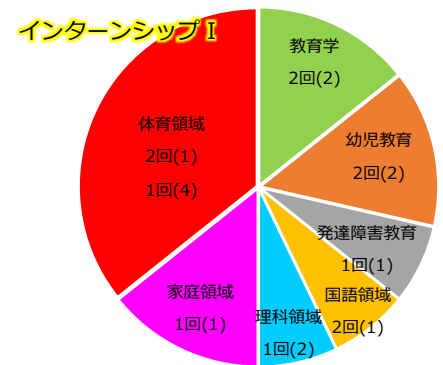


図1 2018年度インターンシップ参加学生の内訳（括弧内は人数）

## 1. インターンシップ I・IIのアンケートから

参加学生は小学生スポーツ教室4教室のいずれかに配属され、インターンシップIでは5回（2018年度後期）、インターンシップIIではIと異なる教室で7回の実習（2018年前・後期）を行いました。ここでは、インターンシップ修了者に行ったアンケート結果（一部抜粋）を紹介します。

Q. インターンシップ I / II の内容・客員教授の指導は満足でしたか？、指導力は高まりましたか？

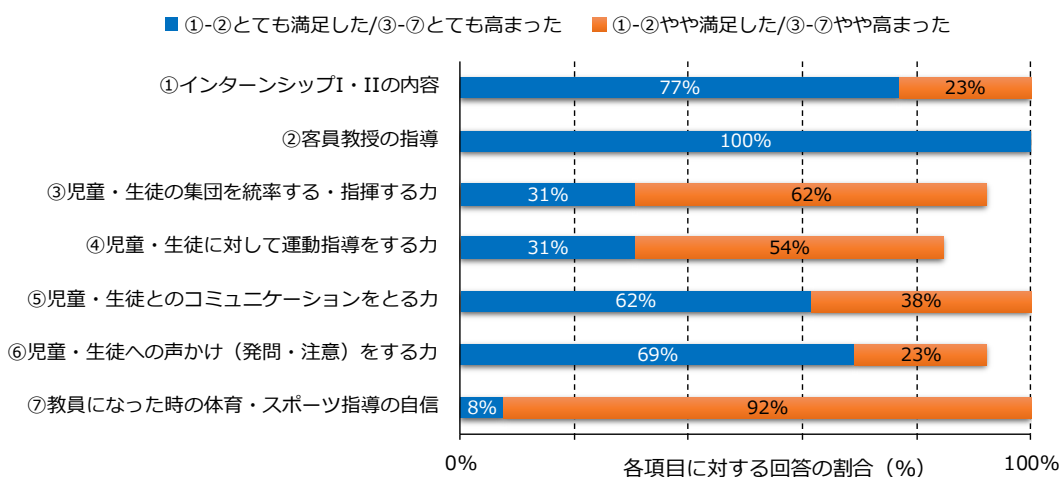


図2 2018年度インターンシップ修了生へのアンケート調査から

学生はインターンシップ・客員教授の指導に高い満足感を得ていました。

さらに、子どもたちの集団をまとめる力、子どもとコミュニケーションをとる力、子どもに声かけをする力をはじめ学生の9割以上は様々な指導力が高まっていることを実感し、スポーツ指導の自信の高まりにつながっています。

Q. 他の学校生活で役立つこと、これから役立つだろうと考えることがありますか？（自由記述より抜粋）

- ・ **学生ボランティア**で子どもたちと関わる時に、どんなふう子どもたちとの距離を縮めるかなど、インターンシップでの経験を踏まえて考えることができた。
- ・ **附属学校参加実習**において、児童との関わり方をよく分かった上で参加できました。
- ・ **模擬授業**での自分の立ちふるまい、**ボランティア**での小学生とのふれあいなど、インターンシップで学んだことを

活かすこともあり、様々な場面で経験が実践に活かされた。

・実際に子どもと接しながら学習する機会が初めてだったので、実践的な学びが**実習などにそのまま役立つ**と思いました。例えば子どもとのコミュニケーションのとり方や指示の出し方などは大変役に立つと思います。

・子どもとの関わり方、声かけの仕方を学ぶことができ、**教育実習で役立てることができると感じた**。それだけでなく、他のスタッフやリーダーとどう協力して、役割分担をしてチームで教えていくかということも学べた。これは教育実習はもちろん、**現場に出てチームティーチングをする上で役立てることができる**と思う。

## 2. インターンシップでの学び

今年度のインターンシップに参加した28名は右の表のように各教室に分かれ指導実習を積み重ねました。陸上教室の参加は少なかったですが、インターンシップの免除対象（各教室でのスタッフを継続的に2年以上実施）となる学生は多く在籍し、担当教員の指導のもと子どもたちへの運動指導を行ってきました。

表1 2018年度インターンシップ受講生、免除対象の内訳

	担当教員	I	II	免除対象
バスケットボール教室	北川順一	3	4	4
サッカー教室	福田博	4	4	9
体操教室	海原洋	7	4	2
陸上教室	福田晴也	-	2	10

ここでは、インターンシップI・IIを行った学生の学びを実習レポートとともに紹介していきます。

### 英語領域専攻3回 Iさん（インターンシップII修了） スポーツクラブ指導入門（体操）⇒インターンシップI（体操）⇒II（サッカー）

子どもたちとのコミュニケーションについて考えながら、これまでの7回（サッカー）の実習に参加してきましたが、子どもたちと関わる時、どのような工夫が必要か、自分に足りていないものは何か、少しずつ見えてきた気がしました。子どもたちとの距離を縮め、信頼関係を築くことはやはり難しいなと感じました。（中略）

サッカーは体育の授業以外で経験のない種目でしたが、子どもたちの様子を見ていて、私自身もサッカーをより好きになり、もっと上手になりたいと思いました。（中略）小学校の教員になると、専門的にやってきた経験のない種目ばかりを体育で指導しなければなりません。テキストや他の先生方からの力も借りてしっかりと知識を得たうえで、今回のように子どもたちと一緒に練習をしていくという気持ちを忘れずに指導していけたらいいと思います。

教育実習を控えています。正直まだまだ子どもたちと関わる経験が少なく、子どもたちの反応を予測したり、とっさに判断して柔軟に対応したり、そういった力はまだまだ身につけていないと思います。KYO<sup>2</sup>クラブでは公立小学校の子どもたちの学校外での様子を見ることができて、子どもたちから学ぶことがたくさんありました。KYO<sup>2</sup>クラブでのインターンシップを通して、改めて教員になりたいと思う事ができ、このような機会があることは本当にありがたいと思います。もっともっと現場での経験を増やして、大学での学びとつなげて、自分自身の力に変えていきたいと思っています。



インターンシップIの  
体操教室での一場面  
(Iさん)

### 音楽領域専攻3回 Tさん（インターンシップII修了） スポーツクラブ指導入門（サッカー）⇒インターンシップI（バスケ）⇒II（陸上）

このインターンシップIIで学んだことを大きく2つに分けてまとめたい。まず1つ目は、スポーツが得意でなくてもそれを教えることはできるということです。もちろん、教師が動きを上手くやってみせて、それを真似して理解することができれば、子どもたちも理解しやすいと思います。しかし、上手くできるというのは、スポーツ指導において一番大切ではないと感じました。教師が上手くできなくても、（中略）代用する方法はたくさんあり、それよりも、集団をまとめて指示を通し、活動を展開していく力が必要であると感じました。（中略）

2つ目は、苦手なことに取り組む子どもに、どうサポートしてあげれば良いかということです。私は運動が苦手で、これまでの運動経験も乏しく、（次ページに続く）



インターンシップI（バスケ教室）  
の事後指導（右手前、Tさん）

教室に参加する中で、どのように動いて良いかははじめはわかりませんでした。スタッフの人たちには当たり前で、考えればわかる動きでも、私にはわからず、上手く動けないことがたくさんありました。そんな時、(中略)声をかけて、気にかけてくれるスタッフがいました、その会話の延長線上で子どもとの関わりにもアドバイスを下さり、わからなかったことがわかるようになり、安心して参加することができるようになりました。私は声楽を専攻していますが、音楽以外を専攻している人が合唱を教えるとなった時に、私が受けたようにサポートをしていきたいと強く思いました。

7回の教室と事前ミーティングに参加し、メニューの組み方や活動の展開の仕方について、理解を深めることができ、スポーツを教えることに対しての不安を減らすことができました。指導の仕方やその技量について、まだまだ課題はありますが、現場に出るまでに少しずつ克服していきたいと思えます。



インターンシップ修了の  
学生たちの実習風景  
(左) 英語領域専攻 3回  
Rさん  
(中) 数学領域専攻 3回  
Kさん  
(右) 数学領域専攻 3回  
Tさん

### 家庭領域専攻 2回 Yさん (インターンシップ I 修了)

スポーツクラブ指導入門 (バスケ) ⇒ インターンシップ I (バスケ) ⇒ II (2019 に体操を予定)

私はインターンシップ I でもバスケ教室に参加しました。前回のスポーツクラブ指導入門 (SC 入門) では、子どもたちの成長する姿を観察することはできましたが、深く関わったり、コミュニケーションをあまりとることができず、自分的には不満足な状態で終わってしまいました。今回は悔いが残らないようにと思い、毎回、教室が始まる前に、意識して取り組むことを自分の中で決めてから参加するようになっていたので、毎週違った視点で取り組むことができました。SC 入門と比べて私自身が変わったなと思うことは、子どもたちとコミュニケーションがとれるようになったことです。(中略) 最後の回では、私の名前を覚えて呼んでくれたり、(中略)「先生こんにちは！」と元気よく挨拶してくれるなど、子どもたちから声をかけてくれるようになりました。名前を呼んでくれた時には本当にうれしかったです。(中略) バasketボールの専門的知識があるわけではないので、技術面のアドバイスをすることは難しいと思っていましたが、気づいたことを伝えるだけでも子どもたちの力になれることに気づくことができました。ほんの少しアドバイスをしただけでも、すぐに自分のものにできる子どもたちは本当にすごく、毎週のように成長していく姿を見ることができたので、とても楽しかったです。



インターンシップ I の  
バスケ教室での一場面  
(Yさん)

インターンシップ I を通して、そのスポーツの専門的な知識がなくても気づいたことを伝えたり、そのスポーツができなくても頑張っている姿を見せることによって、子どもたちの力になれることがわかりました。やはり、1番の目的は子どもたちが楽しくスポーツをすることなので、そのために自分ができることを自分なりに考えて取り組んでいくことが大切だと感じました。子どもたちの笑顔は先生にとって本当にやりがいになると思うので、笑顔を引き出す力も身につけたいです。インターンシップ II にも参加し、子どもと関わることに對してもっと自信をつけて、実際の学校現場に活かしていきたいです。



インターンシップ I の  
学生たちの実習風景  
(左) 家庭領域専攻 2回  
Aさん  
(中) 体育領域専攻 2回  
Mさん  
(右) 体育領域専攻 3回  
Sさん

### 3. 卒業生が感じている本プログラムの効果

2018年には、資格を取得した後に教員として働いている卒業生に対して、プログラムでの経験が教員就職後に役立っている（役立った）かに関するアンケート調査を行いました（回収率 81.0%）。卒業生の多くはプログラムの経験が教員就職後の様々な場面で役立っていると回答をしています。ここではその結果の一部を紹介します。

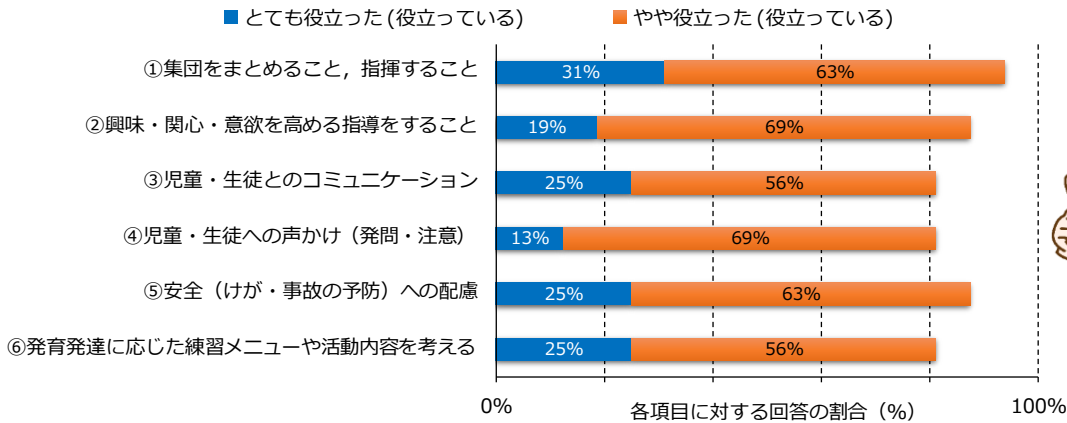


図3 体育・スポーツ指導力養成プログラム修了生への卒業生アンケート調査から

詳しくは  
Web マガジン参照



8割以上の卒業生が  
役立っていると実感

プログラムの経験は  
現場で確実に活かしている

・主に小学生の陸上教室で経験をつみましたが、事前に練習内容や、教具、教材などを工夫することや、自分1人でなくグループで考えたことが、今となっても「どうすれば、興味を持てるか」「発達段階に応じた内容はどのようなものか」という考えの根本になっているところもあり、良かったと思います。

・体操教室、陸上教室でのサポートをしていた経験から、運動が苦手な子への補助を学びました、指導の流れやポイントは、大学での知識や、当時教えて頂いた事を、今見ている子どもたちにそのまま伝えることもあります。（マット運動、鉄棒、短距離走でのウォーミングアップなど）



### 4. スポーツ指導者資格（基礎・上級）認定状況の報告など

通信2号で予告しましたが、2018年度には資格の名称を変更するとともに、資格の認定基準を改定しました。この改定により、従来の卒業時に加え、在学中に資格の認定条件を満たした学生には資格を認定し、教員採用試験をはじめとする就職活動時に資格を有している状況を整えることができました。

表2は2018年度末（卒業時）および2019年度当初（4回生への進級時）に資格認定を行った学生数で、計33名に対して基礎または上級の資格を認定しました。新たに認められた新4回生は21名と多くの学生が資格を取得しています。

なお、すでにインターンシップを修了していますが申請には至らなかった新4回生も複数おり（理科領域、数学領域、美術領域、音楽領域など多彩です）、それらの学生も「資格取得見込み」として教員採用試験、その他就職活動においてプログラムで培った力を発揮してくれることを願っています。

2019年度もプログラムはこれまで通り進行していきます。**4月17日（水）12:50分より（大講義室1にて）、体育・スポーツ指導者養成プログラム兼スポーツクラブ指導入門の説明会を実施します。**この通信を手にしてプログラムに興味を持った学生のみなさん、プログラムの経験は学生生活そして教員生活に確実にプラスになるので、是非参加して下さい。

また、説明会に参加できない学生は、本プログラム担当事務（教職キャリア高度化センター1F、スポーツ指導者養成オフィス）または、体育学科の小山まで連絡して下さい。説明会で配布する資料を用いて個別に対応します。



← 本プログラムに関する情報が掲載されています。ぜひ、見て下さい

教職キャリア高度化センター スポーツ指導者養成部門  
体育スポーツ指導力養成プログラム  
(担当) 小山 宏之

表2 2018年度および2019年度当初におけるスポーツ指導者資格（基礎・上級）認定者の内訳

基礎		上級	
教育学	1 (1)	教育学	2 (2)
発達障害教育	1 (1)	発達障害教育	2 (2)
体育領域	24 (15)	体育領域	3
計	26(17)	計	7 (4)

注) 数字は人数、( )内は2019年度当初に認定された人数